

RとNのカアディスからの手紙（103） 2006年4月28日

「トラファルガル」の巻



トラファルガル岬に行ってきました。ネルソンが西・仏連合艦隊を打ち砕いた、あの有名な海戦のあったところです。スペイン語では **Cabo de Trafalgar** カボ・デ・トラファルガル、カボは英語の **cape**=岬です。

毎度おなじみのジブラルタル海峡の海図。赤い星がバスの終点ロス・カーニョス・デ・メカ(**Los Caños de Meca**)、画像ソフトではは(ñ)の入力ができませんでした。ロス・カーニョスの赤い星のすぐ左下の紫の涙滴形がトラファルガル岬の灯台です。

その他の地名、タリファ(**Tarifa**)、ヨーロッパ・ポイント(**Europa Point**)、セウタ(**Ceuta**)、タンヘル(**Tanger**=英語では **Tangier**)等はまだ何回も登場しましたからお馴染みですね。バルバーテの緑の星と赤い星の間で海岸線が少し南に出っ張っているところが前に長い散歩をした「タホの断崖」です。そして、左上隅がカアディス。



バスの終点、ロス・カーニョスの停留所で降りてすぐ前の浜へ出るとこの通り。これが大西洋に突き出したトラファルガル岬です。二百年前、この沖で世紀の大海戦が行われたわけですが、そんなことはケほども感じられない明るい穏やかな海でした。

この日は視界もマズマズで、アフリカまでの距離は前にアフリカを見に行ったタリファと較べると3倍以上あるのに、この日のほうがよっぽど良く見えました。日本の太平洋岸一帯では秋から冬にかけて視界がいいのが普通ですね。空気が乾燥するからでしょう。けれども、どうもスペインでは反対のようで、冬の間中視界はパツとしませんでした。特に今年の冬はそうでした。

これから夏にかけてが冬よりも空気の乾燥が激しいのです。夏場は全然雨が降らないのが普通ですからね。特に去年の夏の早魃はひどかった。反対に晩秋から春まで不安定な天気でも雨もケッコウ降ります。今年の冬は良く降ったと思います。両面テープで壁に貼った地図や海図が夏になると剥がれることが多いのは空気が乾燥する証拠でしょう。日本では反対に冬よく剥がれ落ちていました。

私達がロス・カーニョスに着いたのは14時40分頃、途中、渋滞があったので少し遅れたのです。バス停は標識も何も無い、ロス・カーニョスの村はずれ。私達が乗ったバスはここが終点でしたから全員下車、私達を含めて8人の乗客でした。バスはすぐ折り返してカアディス行き最終便となります。一緒に降りた人たちは全員バス停より先にある集落の方へ歩いてゆきました。

バス停の前に小さな食料品店があり、看板には「ボカディーヨ作ります」。私達はこの日のうちに帰れるかどうか疑問だったので、一応泊まりの支度で出てきま

した。その代わりいつものクロワッサン・サンドはなし。だから都合よく目の前にあったその店で早速ボカディーヨを作ってもらいました。Rはサラミ・イ・ケソ、Nはハモンセラノ・イ・ケソ。昔のコッペ・パンみたいな形のでっかいパンにサラミもハモンもチーズもギッシリ詰めたカロリー・オーバー間違いナシのすごい奴。



店のオネーさんに、ここへ来た日本人初めて？ と聞くと、¡Si, si, claro! エエ、エエ、勿論、と目を丸くしています。まさか本当にトラファルガルに来た日本人が今までいなかったとは思いませんが、この店でボカディーヨなんか注文した日本人はオネーさんにとって初めてだったことは確かでしょう。

ボカディーヨと缶セルベサを入れた袋を手に浜に出てビックリ。所々にすっぽんポンがゴロゴロ。どうやらここはその手の趣味のヒトの天国らしい。何しろ交通不便で来るヒトも少ないですからね。美しくもナイものを見ながらでは食欲減退、近くの小高い砂丘の上に登って邪魔者を視界から追いやり、マズは良く冷えたセルベサ。

砂丘の上からは青い海を越えてはるかにアフリカ大陸が見えます。絶景、絶景。この正面は海図の **Tanger** の辺りです。ここからの距離は24海里(約45キロ)。前にバルバーテに来た時も、肉眼ではアフリカが見えることは見えたんですが写真には写りませんでした。今日はこの通りバッチリ。

ジブラルタル海峡を出てくる船も良く見えます。青い空、青いアフリカ、もっと青い海を見ながら最高のオベントでありました。私達の部屋から西を向いて見る夕焼けの海も勿論ですが、こうして南を向いて見るあくまで青い海も悪くありません。

オネーさんの作ってくれたボカディーヨはやっぱり大きすぎて、しかも中身も大サービスだったのかヤッパリ私達の胃袋にはオーバー。 それに当たり前のスペイン風に野菜は一切ナシときてますから、セルベサでもないトテモ喉を通りません。

この前の海をもうじきマグロの大群が地中海目指して通過してゆくんです。いや、もうそろそろバルバーテのマグロ漁はシーズン・インかもしれません。暫くご無沙汰だったマグロ屋フェルナンドの店も覗いてみなくちゃ。2月末に行った時、プリマベラ(春)だよ、プリマベラまで待ってネ、と言ってたっけ。



特大コッペ・パン・ボカディーヨで膨らみすぎた腹ごなしに、裸足になって灯台まで砂浜を歩いて行くことにしました。最初の写真を見てください。灯台のある砂丘の左肩まで砂浜を歩いてソコから砂丘の尾根を灯台まで行ってみようというわけ。

この写真はその砂丘の左肩(東の角)から歩いてきた方角を撮ったもの。画面右の白い住宅群の左端から1センチ位左に小さな白い平屋が見えますね、それが食料品店。歩き始めはそこからですから、さあ、ざっと二キロくらいかな。乾いた柔らかい砂地の歩行は、かなりのエネルギー消費で食後の散歩としてはマズ充分。

砂浜にはやはりナチュラルリストがあちこちに散らばっています。 こういう風に堂々と恥じらいも無くサラされると、逆にコッチが恥ずかしいような気になるのは理不尽なハナシです。 周りに当たり前のヒトが大勢いる所でそういう趣味を誇示するのはやめて、どっかでかたまってやったらドウだと思いますけどね。まあ、こっちも気にしなきゃいいんでしょうけど……。でも、気になる。

灯台砂丘は高さ20メートル台でしょうか、尾根はひどい凹凸も無く、案外歩き易いんですが砂が露出しているところは柔らかすぎるし、草が生えているところは時々鬼アザミなんかもあって裸足ではちくちくと痛い。結局灯台まで砂地を拾って裸足で歩いて行きました。

上の写真の左端のすぐ左には灯台に通じる簡易舗装道路があります。写真には入らないようにしましたが、ここにはナチュラルリストだけでなくEU各国のヒッピーも大勢巣食ってしまっているようで、オンボロ・キャラバンや古ワゴン車を自作改造したもの等がその道路に20台ほどもビッシリ連なっていました。

この手の連中にはこういう穏やかな陽気のところは気楽に生活できていいでしょう。帰りにはその道路の彼らの脇を通りましたが、別に物騒な様子無く、中には子連れもいたし、車の中で赤ん坊の泣く声も聞こえてました。警察に排除されるでもなく、どうやらかなり長期に居座っている様子がうかがえました。甚だしい景観破壊。

*



どうですか、なかなかノドカナ、いい所でしょう。この灯台は勿論近代的な装備の現役ですが、管理ビルの右向うにチョビっと顔を出しているのは9世紀に建造された灯台の基礎部分です。ずっと前に紹介したイベリア半島北西部のア・コルーニャ A Coruña にある「エルクレスの塔」(Torre de Hércules=ヘラクレス)なんかは上部構造は大幅に改築されてはいるものの、基礎部分はローマ人の手に成るもので今だに現役です。ここのは9世紀といいますからソレよりはずっと後のムーアのものでしょうが、上部構造は既に崩れ落ちてかろうじて基礎部分だけが残っています。

ソロソロ制限容量が心配になってきました、この項の続きは又来週。

「観光案内所いろいろ」の巻

前項のトラファルガルへの遠足で困ったことが一つありました。

岬の近くにあるロス・カーニョス・デ・メカ(Los Caños de Meca)という村までカアデイスから直行バスが出ています。カアデイスから直線距離なら約50キロ、順調なら約1時間半以下の行程です。けれども便数は思いっきり少なく、カアデイス発は13:00と18:00の2便、向う発が07:30と14:25の2便だけ。

これじゃどうにもなりませんね。例えばカアデイス発13時ので出かけるとうします。順調に行けば向うへ付くのは14時30分少し前。多分その折り返し便が14:25発ということだと思えます。要するにその日はもう帰って来れない、ですね。

州政府の観光案内所についてなんとかナランカ、と聞いて見ました。対応の相手は頼りなさそうなオニーサン。マズ地図を広げて「今、貴方はここにいます」とカアデイスに丸印。(モウ2年も住んでるんだけど)とは言わずおとなしく聞いていました。

「エーっと、トラファルガルは、エーっと」と地図で探すんですが見つかりません。たまりかねて、ココですよ、ぎゅっと指差しました。「そう、ソコです」。

*

ダメだこりゃ。そこで、ちょっと言い方を変えて質問を繰り返しました。私達はどこへ行くか、ドウ行くかは知っています。カアデイスからの直通バスの便数も知っていて、その時間表では日帰りが出来ないの、何か他の方法、例えばどこかの町で乗り継ぐなどして日帰りする方法が無いかどうかを聞きたいんです。

「ありません」これは明快至極。だけど全然信用できません。じゃあ、ロス・カーニョスの宿泊施設を教えてください。彼はあちこち探したうえ10数軒のペンションが載っている表をくれました。結局そこで得られた情報はそれだけ。

コレで案内所の職員と言えるんかね、ツタク。彼は少しだけ英語が話せるということだけで採用されたに違いない。しかし、自分の仕事を少しも大事に思っていないんですね。自分の職に情熱のかけらも持っていない。

彼の「ありません」には全く信頼感アリマセン。トラファルガルがどこにあるかも知らないくせに、ソコからのバスの乗り継ぎ便が無いことだけは即答できるなんて、信用しろというほうが無理というもの。10年前ならここでもうケンカになるところ。まあ、喧嘩っ早いんじゃ折り紙つきのRも最近はずっかり角が取れましたからねー。ムーチャス・グラシアスと丁寧にお礼をいって退散。

その足で、今度はバス会社の案内所へ。今度はオネーさん。ロス・カーニョスからカアデイスへ帰ってくる乗り継ぎ便は？ チャンとありました。大分遅くなってしまうけどコニール・デ・ラ・フロンテーラという町まで19:45に一便、そこで更に2時間近く待って22:00分発カアデイス行き最終便があることがわかりました。

ここで、前項の海図をもう一度ご覧下さい。

水色の星コニール(Conil de la Frontera)が観光案内所では知らなかった帰りのバス

の乗り継ぎ地点。私達はこれまでに何度もこの町はバスで通過しています。だから、下車したことは無かったけれど、そこがバスの中継点であることは大体分かっていたのです。 帰りに2時間の待ち時間があることもその知らない町を探検するにはかえって好都合と思いました。

それにしても、観光案内所の頼りないこと。なかにはとても親切に自分も知らないことはあちこち電話して調べてくれたりするヒトもいますが、私達のように案内所通いのベテランになるとそういう親切なヒトは数少ないことを知っています。こっちのヘソも充分曲がってますから、感じの悪い応対で無駄に腹を立てたくないの、普通は観光地図を貰ったり各種パンフレットを貰うだけにしています。

そういう通り一遍のサービスなら親切であろうが無かろうが関係ないですからね。説明する側の方からの一方通行の間は特に問題はないんです。案内係の態度がコロっと変わるのは、コッチから何か質問をぶつけた時。しかも予想外のことを聞かれた時がイイ案内係と今回のダメ・ニーちゃんみたいななのとの分かれ目です。

本当に聞くヒトの方の身になって、案内という自分の仕事に性根をすえているヒトは自分の知らないことを聞かれても少しも動じず、あちこち心当たりで電話しまくってでも調べてくれます。 去年の夏、近くの夏季限定仮設案内所へ「2006カアディス帆船祭り」のことを聞きに行った時のオバサンがそうでした。

そのイベントは今年の7月、即ち私達が聞きに行った時からは殆ど1年先の話でオバサンも勿論知りませんでした。あちこちに電話してくれたんですが分からず、私達が地方新聞の記事で見たことを話すと、あちこちの新聞社に電話してとうとう突き止めてくれたのです。 そのオバサンは夏季だけのパートタイマーらしかったんですが自分自身その仕事を楽しんでいた様子でした。 だから、こんな普通じゃない質問が彼女には余計楽しかったんでしょうね。 こうでなくっちゃ。

今回のダメ・ニーもちょっとバス会社に電話一本入れてくれれば即座に解決だったのに「ありません」ですからねー。 私達は諦めず、というかこのダメ・ニーに不信感を持つあまり、そんなことは無い筈とバス会社まで歩いて自ら解決したのです。

*

無人の案内所にして地図やパンフレットを置いておくだけ、好きなものを勝手にもらえれば一番いいのにと思っています。しかし、そういう所はマズない。

しかも、シェスタの時間になれば全部締め切ってしまうんです。そういう時だけでもせめて観光地図くらい自由に取れるように窓の外にでも置いてくれればいいのに、そうしてくれている所は見たことはありません。極めて不親切。

昨日も新聞に、ドイツ人観光客が、州の観光案内所で英語がさっぱり通じず、ろくなサービスを受けられなかったと、地元新聞社に怒鳴り込んでちょっとした騒ぎになったという記事が出ていました。やっぱりドイツ人はへこまないんだなー。私達のように「気の弱い」日本人ならたとえそういう目にあっても自分の英語が悪いんだらうと思ってしまうモンネ。

ヒョットすると応対したのはあのダメ・ニーだったんじゃないか？ 私達は苦労してスペイン語で聞いたんだけど、そのドイツ人は勿論英語で押し通したんでしょうね。 でもモウ一步踏み込んで考えると、いくらドイツ人がゴーマンだと

しても、自分の英語が通じなかった、くらいで新聞社にまで飛び込みますかネー。これはやはり、言葉の問題以前の話なんじゃなかるーか。多分案内所の職員の対応が極めて不親切・不誠実だったと考えるのが妥当でしょう。それなら体験上私達にも充分理解できる。だからって怒鳴り込みはしませんけどね。

問題の原因として挙げられることが一つ。それは観光案内所に限らず、およそスペインのあらゆる営業の場で、職員の接客マニュアルというものが存在しないんじゃないかということ。日本のスーパー・レジやファミレス・ウェイトレスのマニュアルどおりの決まり文句一辺倒もウンザリですが、スペインの個人個人勝手気ままな対応もどうかと思います。感じのいいヒトとそうでないヒトの差が大きすぎる。

確かにマニュアル棒読みの接客より人間味はあります。しかしあまりに個人差がありすぎる気がします。日本で品物を放り投げるなんてレジがいたら即刻クビですね。そんなレジがいるはずも無いけど・・・。スペインじゃこんなの当たり前。何か食べながら飲みながらもお咎めなし。信じられない？そう、私達も目を疑います。

新聞で叩かれた州の観光案内所も、職員に、自分が知らないことを聞かれたらどこへでも電話して答を引き出しなさい、と一言、指導しておきさえしたらドイツ人に怒鳴り込まれることも無かったでしょうに。現にその同じ案内所で別の機会に私達の質問に対してセビージャのバス会社に電話して時間表を聞いてくれたオバサンもいたのです。簡単なことですよね。でもダメ・ニーも同じ案内所の職員ですからねー。

では、街の一般のヒトはどうかというと、殆どのヒトは何か聞かれたら実に親切にあれこれ教えてくれます。どうかするとコッチから聞かなくても、私達がチョットでも困った様子でいると、どうしたの？と聞いてくれる人は沢山います。

その親切さ具合は観光案内所に見習って欲しい程。けれどソレは話半分くらい、イヤ四分の一くらいに聞いておいたほうが無難でしょう。延々と教えてくれるからよほど詳しいのかと思うと単にハナシがしたいだけだったりして。

100%ヒトの話を信じたがゆえに困った事になっても結局自分で解決しなきゃなりません。そのくらいならはじめっから安直にヒトに聞かず、自分で調べに調べる、私達は原則そうしてきました。時間は掛かります。その代わり自分で解決すればそれだけ満足感もあります。

でも、ヒトに聞かず自分の足で調べまくるのは並大抵ではありません。改善されつつはあるようですが、何しろ案内表示というものが極めて少ない国ですからね。鉄道駅に運賃表さえ無い。だから4年近くも住んでいていまだに分からないことだらけ。
